

エジプトの村落地図

加 藤 博
岩 崎 えり 奈

はじめに

1. なぜ農村調査なのか
2. 調査村の概要
 - 2- 1 調査村の選定
 - 2- 2 19調査村
 - 2- 3 村の個性と属性
3. 村の個性
 - 3- 1 エジプトの集落形成の歴史
 - 3- 2 二つの村類型：カルヤとイズバ
 - 3- 3 個性の基本指標
4. 村の属性
 - 4- 1 属性の基本指標
 - 4- 2 分析手法と変数の選定
 - 4- 3 分析結果
5. エジプトの村落地図
 - 5- 1 調査村の属性類型
 - 5- 2 調査村の属性と個性
 - 5- 3 文化と地域開発

参考文献

付録

はじめに

われわれは2003年以來、エジプト中央統計局との共同世帯調査という形で、

独自の農村調査を実施するという幸運に恵まれた。もちろん、エジプトにおける農村調査は、これまでも多くの研究者によってなされてきた。しかし、そのほとんどは、特定の村落に関する歴史的調査か、政策目的にもとづく、限定された項目での全国規模の標本調査かのいずれかであった。

これに対して、われわれが実施してきた農村調査は、エジプト中央統計局からの全面的な協力もあって、調査内容の包括性において従来の調査をはるかに凌駕し、その調査対象も19か村に上った。本稿は、この農村調査から得られたデータ・情報に基づいて、エジプトの村落地図を描くことを目的とする。ここで村落地図を描くとは、今後予定されている村を単位としたコミュニティ・スタディの予備作業として、エジプト村落社会をできるだけ包括的に見通せる視座を確保するということである。

以下、第1節において、本稿の根底にある問題関心を、「なぜ農村調査なのか」という問いに答えるなかで説明する。次いで、第2節において、調査村の選定基準とそれに基づいて選定された19か村を紹介する。そして、第3節において、村を取り巻く外部環境—以下、これを個性と呼ぶ—を概観したあと、第4節において、農村調査から得られたデータと情報に基づき村社会の内部構造—以下、これを属性と呼ぶ—を分析し、最後に第5節において、エジプトの村落地図を素描する。3節を中心とした「村の個性」分析は加藤が、4節を中心とした「村の属性」分析は岩崎が主に担当した。

1. なぜ農村調査なのか

エジプトは、農業立国としての歴史を歩んできた。それゆえに、これまでのエジプト社会経済研究は農業・農村研究が主流であった。実際、エジプトの農村社会に関する研究は、枚挙の暇がないほど多い。しかし、こうしたエジプト農村社会研究が、村を単位としたケース・スタディの蓄積がないままに展開してきたことは否めない。

エジプトが自由経済体制下に置かれていた時代（19世紀末から20世紀前半）—それは同時に、イギリスを始めとしたヨーロッパ列強の植民地体制の時代でもあった—、そして、1952年のエジプト革命直後の一時的にエジプトが対外的に

開かれていた時代には、村の社会経済生活に関するモノグラフは比較的多く執筆された¹⁾。

しかし、1960年代以降、エジプトが社会主義経済体制をとり、対外的に閉鎖的になると、この種のモノグラフはほとんど書かれなくなった。そして、この事実が、ジャック・ベルクのエジプト農村研究、とりわけ1957年に出版された『20世紀における一エジプト村落の社会史』²⁾の強い影響力を説明する。この本以降、ひとつの村をとりあげて、そこでの村社会をトータルに叙述・分析した著作は、事実上、執筆されなかったからである。

ところが、この著作で描かれた村社会像には、多くの問題点が含まれている。とりわけ、次の三点が重要である。第一は、地域的な差異が考慮されていないことである。上記著作が対象としたのは、デルタ地方の中央部、メヌフィーヤ県の村落である。ところが、上エジプト地方や砂漠・オアシス地方の村については当然のこと、同じデルタ地方にある村でも、村社会のあり方は異なっている。

第二は、村の「歴史」と称しながら、十分に村の歴史が村の社会構造の分析に反映されていないことである。後に第3節で詳説されるが、エジプトの村落類型として、カルヤ（伝統的な集落）とイズバ（近代の資本主義的農場での飯場の集落）の二つが指摘されてきたが、カルヤ型の集落であっても、経た歴史の違いによってその性格は異なる。

そして、第三は、村での「共同体」の存在が無反省に前提されていることである。ここで共同体とは、村民意識を背景とした規範的な生活空間あるいは小宇宙である。エジプトの村がこうした意味での共同体としての性格を持つことは疑いない。しかし、そこは同時にさまざまな葛藤が日常化し、いくつもの社会関係を通して村は外の世界と結びついていた³⁾。

以上、この三つの問題の存在を考えたとき、ベルクが描いたのは「ひとつの」

1) (加藤・長沢1989:28-29)に挙がっている文献を参照のこと。日本では貴重なエジプト村落論を展開した(木村1973)(中岡1969, 1973)も、エジプト革命後のエジプトが対外的に開かれていた時代での社会調査に基づいている。

2) (Berque 1957)。そのほか、(Berque 1955a, b)を参照のこと。

3) (Kato 2008)と(加藤1993)所収の論文「近代エジプト農村社会研究のためのノート」を参照のこと。

エジプト村落像ではあろうが、それを無自覚にエジプトの「典型的な村社会」とするならば、エジプト村落像のステレオタイプ化は避けられない。それを回避し、実態に即したエジプト村落論を展開しようとするならば、上記三つの問題点を念頭に、村単位のコミュニティ・スタディを積み重ね、ベルクのエジプト村落像を脱構築する必要がある。

しかし、現実には、1960年代から90年代までのエジプトでは、依拠すべき村社会に関する実証的なデータや情報の量はごく限られていた。政治的軍事的な配慮から、外国人研究者はもちろんのこと、エジプト人研究者に対しても、村で社会調査をする機会が奪われていたからである。しかし、1990年代以降、「経済自由化」の進展にともなって、エジプトの研究環境は大きく変化した。その結果、政府の許可が依然として必要であるとはいえ、比較的容易に村での社会調査が可能となった。

そのなかで、われわれは、2003年から2005年にかけて、一橋大学大学院経済学研究科とエジプト中央統計局（CAPMAS）との合同調査プロジェクトとして、エジプト全土で独自に農村調査を実施した。調査の主たる目的の一つは、エジプト農村社会の地域偏差を抽出し、地域ごとに村落構造の特徴を明らかにすることであった。

この農村調査の詳細な内容については、すでに別の機会で紹介した⁴⁾。そこで、ここではそれを繰り返さず、われわれの農村調査の特徴を調査村の選定に焦点を絞って解説を加えてみたい。

2. 調査村の概要

2-1 調査村の選定

本稿が扱うのは、2003年から2005年にかけて実施された農村調査で調査対象となった19か村である。村の選定は、われわれの問題関心とエジプト中央統計局のスタッフからのアドバイスに基づいてなされた。調査のサンプル数は、村の人口規模で多少の調整をしたものの、基本的には、ランダムに抽出された600世

4) (加藤・岩崎 2005)ほか、参考文献にあるKato・Iwasaki、Kato et al.の文献を参照のこと。

帯である。

なぜ19か村という多くの村を対象に農村調査を実施したのか。それは、村の属性のほか、村の個性をも基準にして、村を類型化できないかと考えたからである。ここで、個性とは村の外部環境を意味するが、具体的には、自然環境や都市からの距離などの立地条件、さらに村の歴史にかかわる集落の形態などである。こうして、下記に述べる二つの基準のほか、この個性をも考慮して村を選定したため、19という多くの村が研究の対象となった。

調査村の主たる選定規準は、次の二つであった。第一は、中規模の村落を選んだことである。われわれが目指したのはマクロな次元での社会科学的分析とミクロな次元でのコミュニティ・スタディの融合であった。その結果、一方では、世帯を単位としたデータの収集に努めるとともに、他方では、可能なかぎり悉皆調査に近づけるサンプル数の確保にこだわった。

そのために、原則として、調査村を規模のあまり大きくない、人口数が5,000人から6,000人程度の中規模の村に特定した。その程度の規模の村ならば、想定した調査サンプル数600世帯でもって、悉皆に近い調査となりえるだろうと考えたからである。

もちろん、その結果、選定にかかわるバイアスが生じたことは認めざるを得ない。というのも、第3節で詳しく論じるように、エジプトの伝統的な村落は、形成の歴史的な経緯から、典型的な集村形態をとっているからである。そのため、エジプトの村は人口1万人を超える大きな規模の村が多く、2006年の人口センサスによれば、村当たりの平均人口は9,253人である。

したがって、調査村はエジプト農村全体のなかでもやや小さなほうであり、古い時代に起源を持つ村よりは、19世紀以降の近代になって発展した規模の比較的小さな村である可能性が高くなる。こう考えると、調査対象となった19か村は、代表性という点に関して問題が出てくるであろう。しかし、村の歴史的な個性を考慮することによって、この村の規模にかかわる偏りを回避することができたと考えている。

第二は、選定において、特定の地方や地域に偏ることのないようにしたことである。そもそも、われわれのエジプト農村社会研究の出発点には、ともすれば単

調でステレオタイプ化された水利社会として描かれがちなエジプト農村社会を、地域的な差異の視点を導入して打ち破ろうとの問題関心があった。

そのため、村落の選定に当たって、その準備作業として、エジプトにおける地域類型を抽出する試みをした。それは、1996年の村を単位とした人口センサスと「所得と消費に関する世帯調査1999/2000年」の村を単位に集計されたデータを使ったクラスター分析の試みである。分析に用いた変数は、世帯年間平均所得、教育水準、就業形態（就業状況、セクター、経済活動、職業地位）など、合計28変数である。その結果、下エジプト中心部、下エジプト周辺部、上エジプト中部（中エジプト）、上エジプト南部（上エジプト）、オアシス地域の五つの地域が抽出された⁵⁾。

5) (Kato・Iwasaki 2008:14-16)。図表は、農村調査の対象となった後述する19か村が、そこで抽出されたクラスターのどれに該当するかを示したものである。なお、リワー・スピーフ村はこの図表から外れている。この村を単位としたデータが1996年人口センサスデータセットでは取られていないためである。

図表：19調査村の所得水準・教育水準・就業部門からみたクラスターの特性(ワード法)

クラスター	地域	特性	調査村
1	都市近郊	中所得水準 中教育水準 民間非農業部門	
2	下エジプト周辺部 上エジプト南部 オアシス地域	中所得水準 中教育水準 農業部門・政府部門	Kafr Shubrahur Zahra
3	下エジプト中心部 オアシス地域	中所得水準 高教育水準 政府部門	Abu Senita Abu Tawala Kafr Beni Hilal Sheykh Issa Bulaq Munira Balat Rashda
4	下エジプト周辺部	高所得水準 農業部門	Hamra Demeshqin
5	下エジプト周辺部 上エジプト中・南部	低所得水準 低教育水準 農業部門	Sidi Oqba Borr Bahry Homa Beni Samrag Kawamel Bahry Awlad Sheykh

(出所) エジプト中央統計局、1996年人口センサスデータセット、「所得と消費に関する世帯調査1999/2000年」データセット。

2-2 19 調査村

この五つの地域が、調査村の選定の基準となった。調査の対象となったのは図表1と図表2で示される19か村であるが、それを地域ごとに整理して列挙すれば、次の通りである。

(1) 下エジプト中心部

エジプトは、行政的に見て、カイロを境として、北方の地中海までの下エジプト・デルタ地方、南方の上エジプト地方、そして辺境地方に分かれる。下エジプト中心部は、下エジプト地方のうち、ロゼッタとダミエッタの二つのナイル支流には含まれた地域を主として指す。

現在の県で言えば、北からダカフリーヤ県、ガルビーヤ県、メヌフィーヤ県、現在ではその多くが大カイロ圏に組み込まれているカリュビーヤ県に相当する。この地域は、古来、エジプトの農耕地帯として発展した地域であり、そこでの村落規模も概して大きい。

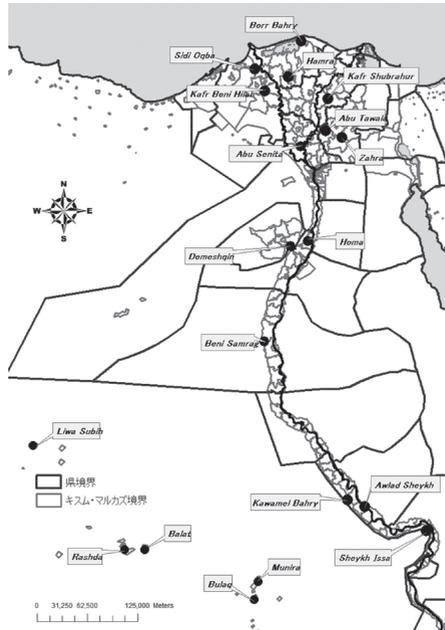
図表1 19調査村の概要

地域類型	村	県	郡	人口(2006年)	サンプル世帯数	調査年
下エジプト中心部	Abu Senita	Menufiya	Bagur	4,468	600	2003 - 2004
	Kafr Shubrahur	Daqhaliya	Shinbelawin	515	130	2005
下エジプト周辺部	Zahra	Sharqiya	Zagazig	5,082	600	2003 - 2004
	Abu Tawala	Sharqiya	Mit al-Qamh	5,458	600	2003 - 2004
	Kafr Beni Hilal	Beheira	Damanhur	5,933	600	2005
	Sidi Oqba (1)	Beheira	Mahmudiya	20,429	600	2005
	Hamra	Kafr Sheykh	Kafr Sheykh	9,252	1,000	2005
	Borr Bahry	Kafr Sheykh	Burulus	8,214	200	2005
上エジプト中部	Homa	Beni Suef	Wasta	6,148	600	2003 - 2004
	Demeshqin	Fayyum	Fayyum	6,501	600	2005
	Beni Samrag (2)	Minya	Samalut	9,810	600	2005
上エジプト南部	Kawamel Bahry	Sohag	Dar al-Salam	4,461	600	2003 - 2004
	Awlad Sheykh	Sohag	Sohag	5,242	600	2003 - 2004
	Sheykh Issa	Qena	Qena	5,651	600	2005
オアシス地域	Bulaq	Wadi Gedid	Kharga	1,825	300	2005
	Munira	Wadi Gedid	Kharga	1,915	300	2005
	Balat	Wadi Gedid	Dakhla	4,273	550	2005
	Rashda	Wadi Gedid	Dakhla	4,364	550	2005
	Liwa Subih	Wadi Gedid	Farafra	2,710	100	2005

注(1) Sidi Oqbaは52の集落からなる村であり、そのうち調査の対象となったのは、Ezba Sidi OqbaとEzba al-Hajarの二つである。

注(2) Beni Samragは25余りの集落からなる村であり、そのうち調査の対象となったのは、Ezba Qasr Ummar、Ezba Abdulla、Ezba Abdulsalamの三つである。

図表2 19調査村の立地



この地域から調査村として選定されたのは、アブー・スィネータ村とカフル・シュブラフル村の二つである。

(2) 下エジプト周辺部

下エジプト周辺部は、下エジプト地方のうち、ロゼッタとダミエッタの二つのナイル支流の東西に位置する地域を主として指す。現在の県で言えば、東部のシャルキーヤ県と西部のブヘイラ県、そして北部のカフル・シェイフ県に相当する。その東西の砂漠に近い地域、また北の地中海に近い地域は、19世紀以降の近現代に開発されたいわばエジプトのフロンティアである。そのため、ここでは、比較的規模の小さな村落が多くみられる。

この地域から調査村として選定されたのは、ザフラー村、アブー・タワーラ村、カフル・ベニー・ヒラール村、シーディー・オクバ村、ハムラー村、ボッル・バハリ村の六つである。

(3) 上エジプト中部

上エジプト地方は従来、サイドと呼ばれ、古来、行政的のみならず、文化的にも、下エジプトと異なる地方と認識されていた。このことは、住民の意識にも反映され、彼らの多くは、自らを「アラブ」と意識してきた。彼らにとって、エジプトの農民を意味する「ファッラーヒーン」とは、下エジプトの住民を指す。実際、上エジプト地方には、アラブの定住村が多い。この上エジプト地方は、さらに二つの地域に分けられる。上エジプト中部（中エジプト）と上エジプト南部（上エジプト）である。上エジプト中部は、現在の県で言えば、カイロに比較的近いベニー・スエフ県、ファイユーム県、そしてミニヤ県に相当する。

この上エジプト中部から調査村として選定されたのは、ホーマ村、デメシュキーン村、ベニー・サムラグ村の三つである。

(4) 上エジプト南部

上エジプト南部は、深部上エジプトであり、現在の県で言えば、アシュート県、ソハーグ県、ケナ県、そしてアスワン県に相当する。

この上エジプト南部から調査村として選定されたのは、カワメル・バハリール村、アウラード・シェイフ村、シェイフ・イーサー村の三つである。

(5) オアシス地域

以上の四つの地域がすべてナイルの水で農耕が営まれるナイル流域（ナイル峡谷）に立地しているのに対して、このオアシス地域は辺境地方に位置する。辺境地方とは、ナイルから遠くはなれた、東部（アラビア）砂漠地方、西部（リビア）砂漠地方、シナイ半島、リビアとの国境に接したマトルフ地方からなる⁶⁾。そのうち、調査の対象となったのは、西部（リビア）砂漠に展開している、そして行政的には「新峡谷（ワーディー・ゲディード）」県に所属するオアシス村落である。この「新峡谷」県は、ハルガ、ダハラ、ファラフラの三つのオアシスからなる。

6) 行政区分では、辺境県はシナイ半島の北シナイ県と南シナイ県、東部（アラビア）砂漠の紅海県、西部（リビア）砂漠のワーディー・ゲディード県、マトルフ県からなる。

このオアシス地域から調査村として選定されたのは、ブーラク村、ムニーラ村、バラート村、ラシュダ村、リワー・スビーフ村の五つである。

2-3 村の個性と属性

さて、本稿の目的はエジプトの包括的な村落地図を作ることにあるが、その主たる作業は、第4節における村の属性に関する分析である。しかし、それと並んで、村の個性の考察も不可欠な作業である。それが村の属性に関する分析の実証性を担保することになると考えられるからである。村の属性——村社会の内部構造——は村の個性——村の外部環境——から規制を受けるからである。

こうして、本稿では、村の属性を村の個性と関係づけて分析し、エジプトの村落地図の作成を試みるが、これは、少し考えてみただけでも、無謀とさえいえる試みである。属性についてはともかく、個性に関する限り、すべての村はそれぞれの個性をもち、その個性を数量化することは難しいからである。そのため、村はその個性ゆえに、ほかの村との比較を容易に許さない。

もっとも、この困難は、研究の当初から織り込み済みであった。というのも、先に述べたように、われわれは研究の目的を、マクロな次元での社会科学的分析とミクロな次元でのコミュニティ・スタディの融合に求めたからである。社会調査において、選定に伴うバイアスを意識しながらも、中規模の村落を選んだのも、将来での村を単位としたコミュニティ・スタディの実施を前提にして、そこでは悉皆に近い規模での世帯調査が可能であると判断したからであった。つまり、村社会の構造に関する数量的な属性分析が、村に固有な個性と接点を持つようにと期待したのである。

しかし、それにしても、村の個性の比較とは、その情報の収集作業を考えただけでも、気の遠くなるような作業である。そこで、個々の村の個性については、今後実施を予定している村のコミュニティ・スタディにおいて言及するとして⁷⁾、本稿ではとりあえず、村の個性をいくつかの基本的な指標を取り上げるなかで論

7) われわれはすでに、(加藤 1997) (Kato・Iwasaki 2008, Kato et al. 2010) のようなコミュニティ・スタディを開始している。

じることとする。

村の個性を形成するのは、その村を取り巻く空間と時間にかかわる、村の生活を外から規制する環境あるいは条件である。このうち、空間に関しては、すでに地域類型を抽出する議論のなかで触れた。そこで、次に以下では、時間に関する個性、つまり村の歴史について言及する。

3. 村の個性

3-1 エジプトの集落形成の歴史

19世紀以前の時代において、エジプトに存在した集落は単純な条件のもとで立地していた。つまり、ナイルは年一回、定期的に氾濫を繰り返したが、エジプトの集落は、この氾濫時に冠水しない小高い場所（マウンド）に作られたのである。

このナイルの氾濫を利用した灌漑はベイスン灌漑と呼ばれたが、それは、氾濫による水位の上昇時に、堤に囲まれた広大な耕地（ベイスン）にナイルの水を引き入れ、水位の下落時に、耕地（ベイスン）から余分な水を排出させる灌漑方法であった。そのため、ナイルの氾濫期には、耕地（ベイスン）は冠水し、エジプトは文字通り、海、あるいは巨大な湖の様相を呈した。そのために、エジプトの集落は、高所に形成されざるを得なかった⁸⁾。

その結果として、ナイルの流れが大きく変化しない限り、長期にわたって集落はほぼ同じ場所に立地し、村には長い歴史が堆積することになった。同時に、この限られた条件で立地した集落はいわゆる集村形態をとり、その規模は大きくなった。かくてエジプトでは、この自然に形成された集落、つまり自然村が、地方行政の末端単位としての行政村として機能した。

もちろん、この叙述は抽象化され、一般化されたものである。実際には、前近代においても、ナイルの渇水期でも水の利用が可能な地域にあっては、用水、排水のための運河が作られ、揚水車（サーキヤ）などの灌漑器具を使った、年間を

8) エジプトの灌漑システムについての文献は、枚挙に暇がないが、とりあえずは（加藤2010）を参照のこと。

通しての耕作が可能であった。

また、砂漠に隣接する地域では、毎年土地の割り替えを伴う、粗放な農耕が展開していた。そのため、過度な一般化は避けなければならないが、主としてベイスン灌漑で農業が営まれていた19世紀以前の時代における集落の立地に関しては、こうした抽象化、一般化はおおむね当てはまると思われる。

この集落の立地のあり方が大きく変化したのは、灌漑方法がドラスティックに転換した19世紀以降における近現代においてであった。つまり、その間、エジプトの灌漑はそれまでのベイスン灌漑システムから、用水、排水のための大小運河を張り巡らせ、年間を通して耕地に水を引き入れる人工灌漑システムへと移行したのである。この灌漑システムの移行は、1960年代におけるアスワン・ハイダム completion によって完結した。

この過程で、ベイスンを囲んでいた堤は壊され、ベイスンと呼ばれる耕地も、規模の小さな、同率の土地税が課される耕地単位となった。また、ナイルの氾濫で耕地が冠水することがなくなったため、集落が低地にあった耕地にも建設されることになった。

とりわけこの種の小集落が建設されたのは、灌漑システムの移行によって耕作が可能となった砂漠に隣接する開墾地域と、それと重なることが多いが、大土地所有制のもと、商品作物を栽培するために形成された資本主義的な農場においてであった。

ところで、こうしたエジプトにおける集落形成の歴史を振り返るのに、大変に便利な文献がある。それはムハンマド・ラムズィー著『エジプト地理事典』⁹⁾である。そこでは、1943年時点において、村落がまず、文献上では知られているがその時点では存在しない村と、その時点で存在していた村とに分けられ、次いで、後者の村が、「古い村」と「新しい村」とに分類されている。

ここで、「古い村」とは、その名前が前近代の文献において確認できる村落であり、「新しい村」とは、1943年時点で存在しているが、その存在を前近代の文献において確認できない、つまり近代以降に形成された村落である。従来、この

9) (Ramzi 1968)。それに依拠した研究として、(Fanchette 1997)がある。

「古い村」に当てはまる集落はカルヤ、「新しい村」に当てはまる集落はイズバと呼ばれた。

このうち、「新しい村」建設の多くは、カルヤ型の本村あるいは母村からの分村という形をとり、イズバのほか、カフル、ナジュム、ミンシャなどの名称をつけられて呼ばれた。しかし、これらの小集落を意味する単語の用語法には取り立てて大きな違いが見られないため、これらの小集落をここでは一律、イズバ型の村と呼んでおく。

先の『エジプト地理事典』が対象にしているのは1943年時点で存在した村落であり、それ以後に形成された集落には言及されていない。ところが、指摘するまでもなく、1943年以降も多くの集落が建設された。その数は、人口の顕著な増加を背景にして、政府による農地の宅地への転換を禁じる規制にもかかわらず、増え続けた。

『エジプト地理事典』において、1943年時点で確認できる村の総数は4,263。そのうち、「古い村」は2,171、「新しい村」は2,092、そして現在（2008年）のエジプト村落の総数は4,641である。注意すべきは、この数字が1943年以降に建設された小さな集落の数の増加を反映していないことである。

それは、これらの小集落の一部は独立した村として登録されたが、そのほかは従来の子の付属集落（イズバ）として登録されたからである。この小集落の統合は、地方行政単位の分散化を嫌い、中央集権化をめざすエジプト政府が行政村の数を整理する過程において加速された。ともかく、このようにして、集落の分布状況からみて、エジプト農村部の景観は近現代に至って、一変することになったのである。

3-2 二つの村類型：カルヤとイズバ

以上のエジプトの集落形成の歴史を、二つの村落類型、つまりカルヤ型とイズバ型の村落類型論として整理しなおしてみよう。そのことによって、エジプト村落の個性にかかわる問題群があきらかになるからである。

さて、繰り返すことになるが、これまでのエジプト農村研究において、二つの性格を異にする村落類型が指摘されてきた。カルヤ型村落とイズバ型村落である。

カルヤとは文字通り「村」を意味するアラビア語であり、少なくともその名称に関する限り、その起源を前近代にまで遡らせることができる伝統的な、そして先の表現を使えば、「古い」村落を意味する¹⁰⁾。

他方、イズバは、現在では、地方行政の末端単位である行政村に付属する集落を意味する。しかし、イズバという言葉の語源は明らかでないが、この言葉は、歴史的には、先のエジプトの集落形成史で触れたように、近代以降の資本主義的な農場において労働力を提供した農民が居住した飯場的な集落を意味した。このイズバ型の村落はその景観のほか、そこで営まれた社会生活においてカルヤ型とは対照的であったが、その理由は、集落の形成契機の違いである。

つまり、カルヤ型の村落が前近代のベイスン灌漑時代の耕作条件に対応する形で、古くから農業が繁栄した地域に立地したのに対して、イズバ型の村落は、多くの場合、近代におけるベイスン灌漑から人工灌漑への移行にともなって、新しく開拓された地域に建設された。そして、その新開地では、大地主が経営する資本主義的な農場が展開した。イズバ型村落は、そこで安価な労働力を提供する農民が居住する集落として形成されたのであった。

このように、カルヤ型村落とイズバ型村落の類型化は、先に述べた灌漑システムの移行のほか、大土地所有制の展開や資本主義的経営による商品作物の栽培など、エジプト社会経済史研究にとって重要な課題と深く関係している。そして、それが村での行政や社会生活の違いとしても反映したであろうことは、容易に想像がつく。

実際、カルヤ型とイズバ型の村落の違いは、村落行政制度の違いとしても現れている。つまり、カルヤ型の村落では、村長（ウムダ）とシェイフ・バラド（村長老）——彼の親族は同じ地区に住んでいたところから、彼は同時に、地区長でもあった——を頂点とした、有力家系の合議制で村社会が運営されてきたのに対して、イズバ型の村落においては、領主・地主の農場支配人によって村社会が運営されるのを基本とした。領主・地主が不在地主の場合、支配人は領主・地主か

10) 村落類型については、(Ghannam 1944) (Mosseri et al. 1921a, b) (Lozach et al. 1930)などを参照のこと。

ら派遣されるか、彼らの利益を代弁する在地の人間から任命された。

かくて、カルヤ型の村落での行政の特徴は、住民自身による運営であった。その頂点に村長（ウムダ）職があるが、それは、19世紀の中葉における地方行政の再編成過程で、地方行政の末端単位である村（カルヤ）での首長ポストとして導入された。それ以降、今日に至るまで、村長（ウムダ）は村落行政において大きな権限を持ち、伝統的な村（カルヤ）を象徴する存在である¹¹⁾。

さらに、カルヤ型とイズバ型の村落の違いは、村落行政の違いとも関係して、村民の村意識においても現れている。もっとも、エジプトの村が、少なくとも日本の「ムラ」と同じ意味で、村社会であるか否かについては意見の分かれるところであろう（Kato 2008）。しかし、それがどのような性格のものであれ、エジプトの村がある種のまとまりを持った社会であろうとする限り、なんらかの村に対する帰属意識、つまり村民意識が不可欠である。

そして、この村民意識は、伝統的なカルヤ型の「古い村」と被隷属性の強い農民が住まわされた飯場の集落であるイズバ型の「新しい村」とでは、その住民構成のあり方から、異なったものになるであろうことは容易に想像される。また、モスク（イスラム礼拝所）や住民の集会所などを中心とした村落共同施設は村民意識が可視化したものとして捉えられるであろうが、一般的にみて、カルヤ型の村ではかかる村落共同施設が充実しており、イズバ型の村では貧弱である。

3-3 個性の基本指標

さて、個性をもって、村を比較するための基準とすることは難しい。それは、まず何よりも、繰り返し指摘しているように、個性を数量化することが困難だからであるが、それとともに、個性を比較するために設定した指標自体が、歴史のなかで変化するからである。

つまり、エジプト村落の個性にかかわる問題群をあきらかにする枠組みとして抽出したカルヤ型とイズバ型の二つの村落類型も、あくまでも現実を抽象化した

11) ウムダ職の導入については、(加藤 1993 : 201-204) を参照のこと。また、ウムダの選出方法の変遷については、(長沢1994)を参照のこと。

理念型であり、現実の集落形成の歴史では、この二つは交差し混ざり合っている。その結果、現在では、どちらかの類型として分類するのが困難な村も多く、二つの村落類型に基づいて設定した比較のための指標が曖昧になる。

たとえば、村がその歴史において、大地主の所有を経験したか否かは、村の社会生活に大きな影響を持ったであろう。実際に、それは、カルヤ型とイズバ型の二つの村落類型を生み出した背景であった。しかし、19世紀後半から20世紀前半にかけての大地主制の展開において、イズバを中心にした大地主制は、入り作などを通して、周囲のカルヤの住民の経済生活を巻き込んでいく。こうして、カルヤ型村落類型とイズバ型村落類型との境界は曖昧になる。

また、イズバ型の村落はその形成の契機から、大地主の排除を目指した1950、60年代における農地改革の主たる対象となったと考えられる。ところが、現実には、農地改革に直面した地主が土地の没収を回避するため、事前に土地の分割贈与や売却をはかったり、農地改革時において、土地を家族や親族に分割して登録したりすることは一般的にみられた¹²⁾。この場合、農地改革の有無をもって、大土地所有の存在を示す指標とすることは難しい。

村落行政制度を指標とする際も、同じである。われわれは先に、村長（ウムダ）職は伝統的な村（カルヤ）を象徴する存在であると述べた。しかし、現在において、その権威は揺らいでいる。

村長は、国家と村民の間にあって、一方では国家に対して村民を代表し、他方では国家の役人として村民を管理してきた。この中間的立場から、村長の選出は、国家と村社会との間での駆け引きの場となってきた。国家にとって、村の潤滑な行政を思うなら、村民の選挙による村長の選出をよしとしたが、村の中央集権的管理を目指すならば、国家による村長の任命が望ましい。

歴史的な大勢としては、村民の選挙による村長の選出から国家による村長の任命への移行が見られる。現在（2010年）、村長は国家によって任命されている（Law No. 26 of 1994）が、近年におけるエジプト社会の変容は、村落行政への

12) カフル・シュブラフル村の場合のように、村落所属耕地がワクフ地としてエジプト政府の管理下におかれ、農地改革の対象になった事例もある。この村の歴史については、(加藤1993) 所収の論文「カフル・シュブラフル村の村方騒動」を参照のこと。

国家権力の介入の度合いを大きくし、その結果として、村長職の形骸化、象徴化が進行している。

その象徴が、村長職の代わりに警察の派出所（ヌクタ）がおかれている村の存在である。過去においても、とりわけイズバ型の村落において、村長がいない事例はあった。しかし、今日では、村長の死後、新しい村長が選出されなかったり、選出に長い時間がかかったりする村が見られるようになっている。また、この傾向をよしとする村民も多くなった。しかし、その警察の派出所にしても、村に派出所がないからといって、その村における警察の影響力が小さいということを示すことにはならないだろう。

さらに、村民意識に関しても、また同じことが言える。たとえば、アラブ遊牧民の定住村として出発した村には、アラブ意識を介した村民意識の醸成が予想される。しかし、もし住民の間にアラブ意識があったとしても、それがそのまま村民意識につながるわけではない。アラブ遊牧民の定住村として出発した村にも、その後、多くの非アラブの住民が住み込むようになったし、時間の経過のなかで、アラブ意識といっても、それが村の起源をアラブ遊牧民の定住として認識しているという「伝承」に過ぎないことが多い。

さらに、モスク、村民の集会所（ドゥッワール、ダール・ムナーサバート）、聖者廟などの村落共同施設を取り上げて、同じことを指摘できる。村落共同施設を村民意識が可視化したものと捉え、それらの有無を村の個性を判断する指標とすることは可能であり、有効でもあろう。しかし、この場合でも、その数が多いからといって、高い村民意識を示すとは限らない。モスクや住民の集会所の数が、村の人口規模、家族・親族構造、住民の居住パターンにも関係しているからである¹³⁾。

かつて、村の生活の中心に聖者廟があるといわれたこともあった。しかし、現在では、聖者を村の存在と結びつけて意識している村民がいるとしても、それは古い世代の村民であって、若い世代の村民は聖者に無関心のように思われる。ま

13) こうした「伝統的な」施設のほか、学校、青少年センター、保健センターなどの「近代的な」施設や、農業協同組合などの村落協同組合も村民意識の可視化の指標として役に立つ。しかし、本稿では、それらに言及しない。

図表3 19調査村の個性

地域類型	村	郡	人口 (2006)	形成時期①	村落類型	農産物	村長	派出所	アラブ 定住村	立地	県外への出稼ぎ
下エジプト中心部	Abu Senita	Bagur	4,468	古い	カルヤ	×	○	×	×	Bagurから6km	稀
	Kafr Shubrahur	Sinbillawin	515	新しい	イズバ	○	○	×	×	Sinbillawinから8km	稀
下エジプト周辺部	Zahra ②	Zagzag	5,082	新しい	カルヤ&イズバ	○	?	×	×	Zagzag と Bilbeisから15km	稀
	Abu Tawala	Mit al-Qanb	5,458	古い	カルヤ	×	○	×	×	Minya al-Qanbから8km	稀
上エジプト中部	Kafr Beni Hlial ③	Damanhur	5,933	新しい	カルヤ&イズバ	○	○	○	○	Damanhurから5km	稀
	Sidi Oqba	Mahmudiya	20,429	古い	カルヤ&イズバ	○	○	○	○	Mahmudiyaから9km	稀
上エジプト南部	Hamra	Kafr Sheykh	9,252	古い	カルヤ&イズバ	○	○	○	○	Kafr Sheykhから7km	稀
	Borr Bahry	Burlus	8,214	新しい(1998)	カルヤ(散村)	×	×	○	○	Biltunから10km	稀
オアシス地域	Homa	Wasra	6,148	古い	カルヤ&イズバ	×	×	○	○	Wasraから4km	稀
	Demeshqin	Payyum	6,501	古い	カルヤ	○	④	×	×	Fayyumから14km	稀
上エジプト南部	Beni Samrag	Samlut	9,810	古い	カルヤ&イズバ	○	?	×	○	Minyaから20km	稀
	Kawamel Bahry	Dar al-Salam	4,461	新しい	カルヤ	○	?	×	×	Sohagから12km	カイロの青物商
オアシス地域	Shaykh Issa	A wlad Sheykh	5,242	新しい	カルヤ	×	○	×	×	Dar al-Salamから20km	アアタビ(UAE)の建設業
	Bulaq	Shaykh Issa	5,651	新しい	カルヤ	○	?	×	○	Qenaから8km	紅海岸の石油会社
オアシス地域	Munira	Kharga	1,825	古い	カルヤ	×	○	×	×	Khargaから25km	稀
	Balat	Kharga	1,915	新しい(1966)	カルヤ	×	×	○	○	Khargaから22km	稀
オアシス地域	Rashda	Dakhla	4,273	古い	カルヤ	×	○	×	×	Mutから27km	稀
	Liwa Subhi	Dakhla	4,364	新しい	カルヤ	×	○	×	×	Mutから10km	稀
オアシス地域	Farafra	Farafra	2,710	新しい(1985)	カルヤ	×	×	×	×	Mutから10km	稀

注

① 「古い」「新しい」の分類は、(Ramzi 1968)に従う。(Ramzi 1968)では「新しい」村に分類されたながらも、聞き取り調査では「古い」村との回答を得た村(Kawamel Bahry、Sheykh Issa)があるが、これは、母村と分村との関係に対する認識の懸隔によるものと思われる。

②旧村署名 Fuwadiya

③ 村長およびCAPMAS県支部長らの話によると、中世にヒラール族が上エジプトから移住してできた村だという。

④多くの村民は、自分の村が土地改革の対象になったことを語りがない。?を付したのは、土地改革直前に地主が土地の分割贈与・売却などを行った村であり、農地改革の対象になるべきではなかったものの、村民によれば農村改革の対象とならなかった村である。

た、聖者祭が毎年開催される場合でも、その参加者は、村を超えた広域の住民である。

このように、村を比較するために、個性に基づく指標を設定することは難しい。しかし、ここでひるんでいても仕方がない。そこで、以上の問題点を念頭に置きながらも、本稿ではとりあえず、村の個性を、図表3で列挙されている指標でもって評価したい。

この図表3は、エジプト集落の形成史を背景とし、村落類型、村落行政、村民意識にかかわる問題群を中心に、村の個性にとって重要と思われるいくつかの指標を指摘し、それを19の調査村ごとに整理したものである。

4. 村の属性

4-1 属性の基本指標

われわれは本稿が依拠するデータ・情報を19か村での農村調査によって収集した。その最大の特徴は、調査の網羅性である。つまり、19か村について、属性ならびに個性に関するデータや情報を、大量かつ包括的に収集した。その結果として、調査のテーマが広範囲に渡り、家族や政治、習慣などの非経済分野、さらには住民の意識にまで及んだ。

この点、われわれの調査は、エジプトでの農村調査としては、世界で最も大規模でかつ包括的なものとなった。その中心にあったのが村の属性を分析するために実施されたアンケート世帯調査であるが¹⁴⁾、そのほかに、補足情報を収集するため、各村落の制度や社会経済状況を把握するために村落調査票が作成され、これに基づいて、村長などの村落行政の責任者、農業協同組合、村落有力者などに対して調査がなされた。

アンケート世帯調査のために準備された調査票は、人口、労働力、資産、農業経営、非農業就業、所得と消費、住宅環境といった、主として経済的側面を対象とした客観的指標に関する調査と、住民の意識、態度、習慣、そのなかでもとり

14) 調査項目はまず日本で作成し、それをエジプトに持ち寄り、エジプト中央統計局のスタッフの意見を取り入れて修正し、最終案を作った。調査項目は調査実施期間を通して基本的には変えていないが、第二年度には部分的な加除、修正を施した。

わけ家族に焦点をあてた主観的、あるいは非経済的側面に関する調査から成り立っている¹⁵⁾。それらのデータに基づき、19か村の属性を分析する基本指標を示せば、次のようになる。

なお、基本指標にとってとりわけ重要と思われるデータについては、本稿の末尾での「付録」図表として掲載した。できれば依拠したデータの全てを掲載したいが、限られた紙面では、重要と思われるものに掲載を限定せざるをえなかった。

①世帯の基本属性¹⁶⁾

調査村の平均世帯規模、年齢構成などの指標は、主として下エジプト中心部・周辺部・オアシス地域と上エジプト中部・南部で異なる。総じて、後者の村において世帯規模が大きく、年齢構成が若い。また、下エジプト地域ではボッル・バ

15) このような包括的な調査の実施はエジプトでは初めてであり、調査項目の選定と調査実施の過程で、いくつかの問題点に遭遇した。とりわけ大きな問題点は、次の二つであった。第一は、われわれの研究目的と人口センサスを担当するエジプト中央統計局が採用している定義との齟齬である。そのもっとも大きかったのは、調査時の「世帯」に対する定義であった。当初、調査はエジプト中央統計局による「世帯」の定義にしたがってなされた。エジプト中央統計局による定義によれば、世帯とは、住居と食事を同じくするか、少なくとも住宅と食事の支出を共に支払い、一定程度の家計プールを共にする単位である。

ところが、この定義では、出稼ぎなどの理由で長期不在にしている世帯員は調査対象から除外されてしまう。そこでは、世帯員とは、最低でも調査時までの12か月間に6か月以上を同じ家屋に住み、食事をともにする者を指しているからである。したがって、それは基本的には消費の単位であり、海外出稼ぎなどのために1年間に6ヶ月以上の期間を不在にしている者は世帯員としてみなされない。

この問題に対して、われわれは調査終了後の2006年から2007年にかけて、各世帯における国内外への出稼ぎ者の有無について情報を収集するための補足調査を行った。また、その調査結果をもとに、出稼ぎ者の多い村落については、世帯員の定義を居住期間に限定を加えない形に修正して、追跡世帯調査を行うことよって対処した。

第二は、調査にともなう技術的な問題である。たとえば、実際の調査では、エジプト中央統計局の調査員が世帯を訪問し、世帯主に面接してインタビューを行うのを原則としたが、出稼ぎやその他の理由で世帯主が不在で、ほかの世帯員が調査に立ち会うという場合もあり、その場合、意識を調査する項目に関しては、世帯主の意識ではなく、かれの代わりに回答した世帯員の意識が反映されてしまうことになる。

質問票は、世帯主が回答者であることを想定して設定された。そのため、できるかぎり世帯主に回答してもらうため、世帯主が不在の場合には、世帯主に面接できる日時に改めて訪問するなどの努力はしたものの、世帯主が出稼ぎのため長期間不在である場合など、こうした技術的な欠陥は不可避であり、ある程度我慢せざるを得なかった。

16) われわれはこの論文の執筆と同時並行的に、エジプト農村の世帯・家族構成に関する論文（加藤・岩崎 2011）を執筆している。「世帯の基本属性」に関しては、この論文を参照されたい。

ハリー村、オアシス地域ではリワー・スピーフ村が例外的に村民の年齢構成が若い（付録図表1）。

教育水準についても、地域差が観察される。19か村の平均では35.0%の村民が非識字者である。しかし、その値は上エジプト中部と南部では50%前後に上る。この値は、下エジプト中心部とオアシス地域における値の倍以上である。

下エジプト中心部と周辺部の間でも、教育水準に違いが観察される。下エジプト周辺部の村では非識字者の割合が中心部よりも高い。なかでもボッル・バハリー村が上エジプト地域の村と同じ高い水準である（付録図表2）。

②所得水準と所得源

本世帯調査における世帯総所得は、調査時点までの12ヶ月間（6村は2003-2004年、13村は2005年）における（1）（漁業を含む）農業自営所得、（2）賃金所得、（3）非農業自営所得、（4）不動産所得、（5）金融資産所得、（6）移転所得の合計である。いずれも現金所得であり、自家消費された現物部分を含んでいない。（付録図表3）。

上記の定義にしたがう調査村の世帯総所得は、一人当たり年間2,336エジプト・ポンドである。最も所得水準が低い村は上エジプト中部の3村、次いで下エジプト周辺部のハムラー村とボッル・バハリー村である。一方、最も所得水準が高い村は上エジプト南部のアウラード・シェイフ村とシェイフ・イーサー村である。したがって、上エジプトは下エジプトよりも所得水準が低く貧困率が高い地域として知られるが、調査村の所得水準に関するかぎり、そのような傾向はみられない。

主要な所得源をみると、非農業賃金所得が総所得に占める割合はどの村でも高く、40%前後を占める。農業所得が総所得に占める割合は、突出して割合が高いリワー・スピーフ村、ハムラー村をのぞき、3割から4割程度である。

移転所得は、所得移転の授受の理由が生活費のための親族からの送金であることから、出稼ぎ収入と考えてよいだろう。大半の村では、総所得に占める移転所得の割合が10%以上に上ることから、出稼ぎ収入が重要な所得源であることが分かる。なかでも、アウラード・シェイフ村とシェイフ・イーサー村では移転所得の比重が高い。これは、アウラード・シェイフ村の場合はアブダビへの出稼ぎ、シェ

イフ・イーサー村の場合は紅海沿いのハルガダ市への出稼ぎから得られた収入のためである。

③就業構造

農業への世帯の依存度については、世帯総所得に占める農業所得の割合を基準として所得の側面から、また就業日数を基準として労働力の側面から把握することができる。

まず②において述べた所得に占める（漁業を含む）農業所得の比重を基準に世帯を専従農家、第1種兼業農家、第2種兼業農家、非農業世帯に分けると、専従農家は調査村の平均で全世帯の3割を占めるにすぎない。とりわけ下エジプト中心部トリワー・スピーフ村を除くオアシス地域の村では、専従農家が少なく、全世帯に占める割合が10%以下である。例外はリワー・スピーフ村、漁村のボッル・バハリ村であり、両村では専従農家が80%以上に上る。

次に就業日数を基準として調査世帯の保有する労働力を（漁業を含む）農業・非農業部門別に分類すると、どの村でも農業のみに世帯員が従事する世帯はほぼ皆無である。もっとも、非農業就業日数が世帯員の就業日数総数に占める比重は村によりばらつきがある。非農業就業の比重が最も低い村は、漁村のボッル・バハリ村とオアシス地域のリワー・スピーフ村、次いでシーディー・オクバ村、ホーマ村である。逆に非農業就業の比重が高い村は、下エジプト中心部トリワー・スピーフ村をのぞくオアシス地域の村である。

非農業就業者の大半は、政府部門就業者つまり公務員か学校の教師である。政府部門はとくにオアシス地域で重要な雇用先となっており、就業者の8割を吸収している。逆に民間部門就業者の割合が高い村は、ハムラー村、ホーマ村、ベニー・サムラグ村、カワメル・バハリ村である。ハムラー村の非農業就業者は首都カイロや近郊都市における商業や運輸業の従業者、ホーマ村の非農業就業者はカイロにおける建設労働者、ベニー・サムラグ村の非農業就業者はカイロと近郊都市における建設労働者、カワメル・バハリ村の非農業就業者はカイロ近郊の野菜卸市場商人である。

④土地保有規模

土地の保有状況に関しては、所有であれ賃貸であれ、土地をまったく保有しない世帯が調査世帯の半数を占める。なかでも土地なし世帯が多い村は、漁村のボッル・バハリ村を別として、カフル・シュブラフル村、シェイフ・イーサー村、ラシュダ村、ブーラク村である。これらの村では、土地なし世帯が全世界帯の6割を占める（付録図表4）。

土地保有世帯のなかでは、ナイル川流域よりもオアシス地域において土地保有規模が大きい。これは、オアシス地域では水へのアクセスが耕作に決定的な影響を及ぼすのであって、土地自体は豊富にあるためだろう。とくに土地保有規模が突出して大きいのはリワー・スピーフ村である。

調査世帯が保有する土地の大部分は所有地である。賃貸農地は多くないが、カフル・シュブラフル村、ハムラー村、シーディー・オクバ村、ベニー・サムラグ村、ブーラク村では耕地の4割前後を占める。カフル・シュブラフル村の場合は政府からの賃貸、それ以外の村では村民からの賃貸である。

⑤村民の社会関係

世帯調査では、地縁関係と血縁関係について直接的に問う次のような質問群を設定した。地縁関係（ないしは共同体慣行）に関わる質問群は、サーキヤ（揚水車）、灌漑ポンプ、水路の手入れ、トラクター、耕作、収穫、そしてモスクの建設に関して村民との共同作業に参加するか否かを問う質問群からなる。

これらの質問に対する回答は、耕作について労働力の提供という方法で参加するという回答が多かったハムラー村をのぞき、「参加しない」であった。しかし、唯一、モスクの建設に関しては、どの村でも労働力の提供や費用の負担などの方法で参加する世帯が2割前後に上る。とくにブーラク村をのぞくオアシス地域の村では、モスクの建設に費用を負担する世帯が多い（付録図表5）。

血縁関係に関する質問としては、一般的に、上エジプトではイトコ婚をはじめ親族婚が多いと考えられていることから、世帯主と配偶者との関係を問う質問が設定された。その回答からすると、デメシュキーン村をのぞく上エジプト中部と南部の村において、親族婚が多い。したがって、本世帯調査においても、通説を

裏付ける結果が得られた(付録図表6)。

世帯調査では、血縁関係の紐帯を量的に捕捉するため、村内およびカイロや他の県における親族数に関する質問群も設定された¹⁷⁾。また、比較のために友人・知人の数に関する質問群も設定された。その回答もまた、親族婚と同様の傾向である。世帯主の父系親族数の総数は調査村全体の平均で83.2人であるのに対して、上エジプト地域のホーマ村で212人、ベニー・サムラグ村で123人、アウラード・シェイフ村で137人、シェイフ・イーサー村で143人である。したがって、デメシェキーン村とカワームル・バハリール村をのぞく上エジプト地域の村で親族数が多いと言える。

⑥村落政治に対する態度

村落政治に対する態度を測る質問群は、村長やシェイフ・バラド(地区長)、警察などの村落行政の担い手に対する評価を問う質問などからなる。

「あなたは村長が村人のスポークスマンだと考えますか」に対する5段階の回答では、ザハラー村、ボッル・バハリール村、ホーマ村、ムニール村、リワー・スピーフ村において無回答・非該当が多い。これらの村は、村長が不在の村である。それ以外の村長がいる村では、村長に対して概ね肯定的な評価である(付録図表7)。

「あなたはシェイフ・バラドが村人のスポークスマンだと考えますか」に対する5段階の回答においても、同様である非該当が100%を占めるボッル・バハリール村と54%を占めるリワー・スピーフ村、ならびに「全くそう思わない」が49.3%を占めるカフル・シュブラフル村をのぞけば、概ね調査村ではシェイフ・バラド(地区長)に対して肯定的な評価である。

村の治安の担い手を問う質問は、警察、守衛、シェイフ・アーイラ(家族長)、村長、シェイフ・バラド(地区長)、その他の6つの選択肢から回答を選ぶ選択式の質問である(付録図表8)。当然ながら、村長が不在の村では警察という回答が多い。一方、村長が健在の村では、村長と警察のどちらを治安の担い手とみなすかについて地域的な傾向はみられない。すなわち、アブー・タワーラ村、カ

17) 親族数に関する質問は、父系親族と母系親族の双方について、世帯主と配偶者の両方に訊ねた。本稿では、話の複雑化を避けるため、世帯主の父系親族のみ取り上げた。

フル・ベニー・ヒラール村、シーディー・オクバ村、上エジプト南部の3村、ラシュダ村では村長という回答が半分以上を占めるのに対して、アブー・スイネータ村、カフル・シュブラフル村、ベニー・サムラグ村、ブーラク村では警察という回答が半数以上を占める。

土地、相続、家族問題に関して「争いが起きた場合、誰に解決を頼みますか」という質問では、村長、シェイフ・バラド（地区長）、警察、農民、シェイフ・アーイラ（家族長）、その他から選択回答される。家族問題については、どの村でもシェイフ・アーイラ（家族長）が行うという回答が多い。一方、土地および相続に関しては村長とシェイフ・アーイラ（家族長）が多くなっている。この質問に対する回答の分布もまた、村によりばらつきが観察されるが、それは村長やシェイフ・アーイラ（家族長）のパーソナリティが影響しているためだと考えられる。

⑦生活満足度および階層意識

村落生活の満足度については、生活水準、所得水準、教育と保健医療に対する満足度を5段階の回答で測っている。その結果によると、生活水準については、否定的な意見はほぼ皆無であり、「大変満足している」が調査村全体の51.2%、「まあまあ満足している」が調査村全体の23.0%、「どちらとも言えない」が調査村全体の20.3%を占める。なかでも、リワー・スビーフ村をのぞくオアシス地域の調査村で生活水準の満足度が高く、8割以上の世帯主が「大変満足している」と回答している。

所得水準に対する満足度は、調査村全体の平均で「大変満足している」が31.1%と総じて生活水準よりも満足度が低い。教育についても同様であり、調査村全体の平均で33.0%である。例外的に、ラシュダ村とバラート村で教育に対して「大変満足している」世帯主が80%以上に上る。

保健医療については、どの村でも、不満感が高くなっている。とくに保健医療に対する不満感が高い村は、ボッル・バハリー村に次いでホーム村、アブースイ

18) 質問票では、そのほかに、所得変動に対する認識を測るため、5年前の世帯所得水準に対する5段階評価の質問、5年前と調査時点の世帯所得の変動に対する4段階評価の質問を設定した。

ネータ村、アウラード・シェイフ村、カワメル・バハリール村、バラート村などである。

階層意識については、世帯所得水準に関する5段階での回答により測定される¹⁸⁾。その回答からすると、調査村の平均では、自らの世帯所得水準を中間と考える世帯主が49.0%、中の上と考える世帯主が22.0%、上と考える世帯主が5.5%、下と考える世帯主が9.7%である。したがって、自らの帰属階層が低所得階層だと考える世帯は多くないが、カフル・シュブラフル村、ザハラー村、アブー・タワーラ村、ボッル・バハリール村、ホーム村では、下と回答する世帯主が2割以上に上る。

4-2 分析手法と変数の選定

以下、4-1で説明した属性データの構造を探索的に明らかにしたい。この目的に見合った分析方法はいくつかあるが、ここでは多重対応分析 (Multiple Correspondence Analysis : MCA) を採用する。この分析では、初めにデータの全体的な分散のうち最も多くの部分をとらえる軸 (主軸) を抽出し、次に、主軸によって捉えられなかった分散を最も説明する軸を、主軸と直交する空間の中から抽出し、さらに残された分散について以上と同様の作業を繰り返して行く。

なお、多重対応分析では、抽出した軸で構成された空間に各変数の値をプロットすることができる。この座標空間では、各変数の個々の値 (変数値) 同士における関連の強さが、空間上の距離として示されるので、互いに近くにプロットされた変数値同士は関連が強く、逆に遠ければ遠いほど関連が弱いことになる。一般的な相関係数では一度に2変数間の関連しか把握できないが、この分析では複数の変数値同士の関連を同時に図示できるため、それぞれの変数値同士が持つ多様な関係性を直感的に把握することができる。

分析に用いる変数は、次のとおりである。

(1) 行動変数群

農業依存度の指標として、農業所得が世帯総所得に占める比重に基づく世帯分類 (専従農家、第1種兼業農家、第2種兼業農家、非農業世帯)。出稼ぎの指標として、移転所得が世帯総所得に占める比重 (移転所得比)。政府部門就業者が

世帯員に在るか否かをあらかず政府部門ダミー（政府部門就業）。

(2) 経済水準に関する変数群

年間一人当たり世帯所得（世帯所得）、土地保有規模。

(3) 社会変数群

地縁的紐帯（共同体慣行）の指標として、モスク建設への参加度（モスク建設への参加）、村落政治の指標として村の治安責任者（村の治安の担い手）、血縁的紐帯の指標として配偶者との関係（世帯主と配偶者との関係）。

(4) 世帯の属性

世帯主の教育水準と年齢。

変数の取り方について述べておくと、ここでは簡略化のため、すべて世帯平均ないしは世帯主を基準にとった。それゆえに、収入は世帯員全員のものを合計した値を、教育水準と年齢は世帯主に関する情報を採用している。このやり方には一長一短あるが、それによるゆがみはあまり大きくはないだろうと判断した。

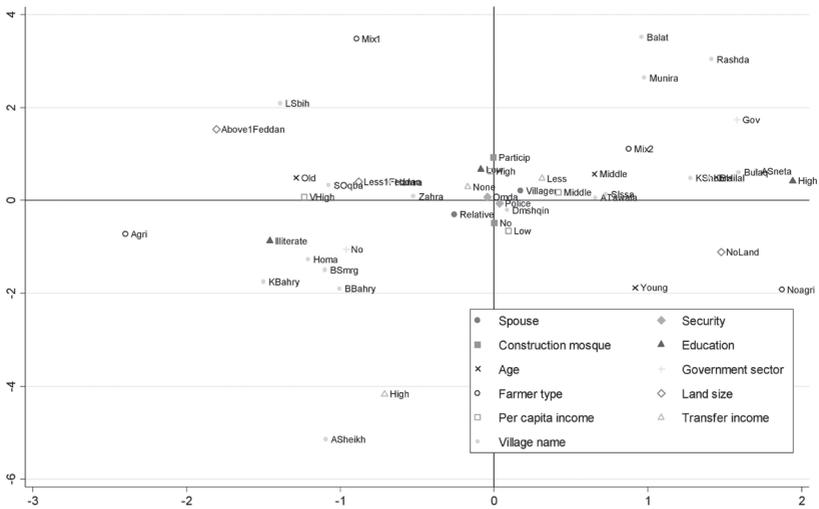
4-3 分析結果

図表4は4-2で取り上げた変数群に対して、多重対応分析を適用した結果である。この図表では、第1軸を横軸に、第2軸を縦軸に取った二次元座標平面に、分析に用いた各変数値の座標をプロットしている。それにより、図上の遠近で変数間の関係を視認できる。

なお、データのすべての散らばりのうち、55.3%が第1軸によって、33.3%が第2軸によって捉えられている。残された分散は11.4%にとどまり、これら2つの軸によって上記の変数値同士の関連性が上手く捉えられていることがわかる。

図表4から第一に指摘できるのは、土地規模と農業所得比の変数値が第1軸に沿って並んでいることである。それはまた、世帯所得の分布とほぼ対応している。ことに図において際立っているのは、第2象限に土地を1フェッターン（4,200 m²）以上保有し、高所得を得ている世帯が集まっている点である。ここには、土地の多寡が村民の所得形成に決定的な影響を及ぼしていることがみてとれる。また、第1軸座標にのみ着目すれば、左から右にかけて、世帯主の年齢が若く、学歴が高く、兼業農家と非農業世帯が多くなる傾向がみてとれる。ここから、第1

図表4：多重対応分析結果（第1軸と第2軸の散布図）



(出所) 農村世帯調査 2003～2005 年。

軸は農業か非農業か、あるいは土地もちか土地なしかという農業依存度を上手く捉えていると言えるだろう。

さらに第2軸に注目するならば、兼業農家と政府部門とが対応関係にあり、第2軸の上に位置している。ここには、農家が政府部門における非農業就業により所得補填を行うことにより、高い世帯所得を得ているといった行為の関連性がうかがえる。もう一つの非農業就業のタイプは、先に4-1で述べたように、移転所得の比重が高いことからして出稼ぎ収入を得ていると考えられる世帯であり、第2軸の下に位置している。ここから第2軸は、非農業就業の2つの志向、つまり出稼ぎか政府部門就業かを捉えていると判断できる。この傾向を出稼ぎ対政府部門就業と呼んでおこう。

ところで、農村社会を総合的に把握する立場からすれば、上記の関連構造が社会的・文化的な要因群とどのように関係しているかが注目される。そこで、図表4をもってしてはこれらの変数の配置がわかりづらいため、それぞれの軸に対す

図表5：多重対応分析における各項目の座標値

		第1次元	第2次元
世帯主と配偶者の関係 (Spouse)	村民	0.174	0.207
	親族	-0.257	-0.305
村の治安の担い手 (Security)	村長	-0.041	0.068
	警察	0.037	-0.060
モスク建設への参加 (Construction mosque)	不参加	0.003	-0.486
	参加	-0.005	0.922
学歴 (Education)	非識字	-1.459	-0.870
	低学歴	-0.086	0.666
	高学歴	1.943	0.421
年齢 (Age)	若年	0.918	-1.878
	中年	0.653	0.570
	高年	-1.287	0.485
政府部門就業 (Government sector)	なし	-0.962	-1.058
	あり	1.580	1.737
農業所得比 (Farm category)	農業専従	-2.397	-0.728
	第I種兼業農家	-0.895	3.479
	第II種兼業農家	0.877	1.106
	非農家	1.874	-1.919
土地保有規模 (Land size)	土地なし	1.477	-1.112
	1 フェッダーン以下	-0.881	0.400
	1 フェッダーン以上	-1.807	1.533
一人当たり世帯所得 (Per capita income)	低	0.094	-0.656
	中	0.420	0.173
	中の上	-0.021	0.626
	高	-1.235	0.074
移転所得比 (Transfer income)	なし	-0.171	0.288
	少	0.311	0.474
	多	-0.712	-4.170

(出所) 農村世帯調査 2003～2005 年。

る各項目の座標を図表5に示した。

まず地縁的紐帯の指標となる「モスク建設への参加」については第2軸において正のスコアがやや高く、小中程度の学歴および中所得水準と距離が近い。したがって、共同体慣行が低学歴者や低所得者によってではなく、一定の所得水準においてなされることが考えられる。

一方、血縁的紐帯の指標となる世帯主と配偶者との関係についてみると、「親族」が第3象限に位置しており、出稼ぎとの関連が伺える。しかし、第1軸と第2軸の両方においてスコアが低く、明確な関連が認められるわけではない。村の治安の担い手についても同様であり、2つの軸との関連はあまり明確ではない。

したがって、社会的・文化的な要素を村民の経済行動と関係があると解釈するのは困難という印象を受ける。裏をかえせば、エジプトの農村社会を説明する最も重要な軸が土地保有と農業への依存度、そして次いで非農業就業性向であることからして、エジプト農村社会は経済行動によって説明される単純明快な構造をもつように思われる。

5. エジプトの村落地図

5-1 調査村の属性類型

さて、本稿の関心からすれば、先の図表4において、調査村が座標軸上でどこに位置しているかが注目される。そこで各村の座標軸上での位置をみると、第1象限の右上に、オアシス地域のムニーラ村、バラート村、ラシュダ村が、第1軸の右で第2軸の原点近くにシェイフ・イーサー村、アブー・タワーラ村、カフル・ベニー・ヒラルル村、カフル・シュブラフル村、アブー・スイネータ村およびブーラク村が位置している。これらの第1象限に集まっている村は、高学歴者や政府部門就業者が多いことで共通している。そのなかで、オアシス地域の3つの村が第1象限の右上に集まっているのは、政府部門就業者の割合が高いことや、所得水準が高めなことのためであろう。

第2象限には、リワー・スピーフ村、ハムラー村、シーディー・オクバ村、ザハラー村が位置している。これらの村は、農業所得比と世帯所得とが高い村である。そのなかで、リワー・スピーフ村が突出して左上に位置しているのは、農業所得比が突出して高いためである。

第3象限には、ホーマ村、ボッル・バハリ村、ベニー・サムラグ村、カワー

図表6 調査村の類型

	下エジプト中心部	下エジプト周辺部	上エジプト中部	上エジプト南部	オアシス
政府部門就業、高学歴、高所得					Munira, Balat, Rashda
政府部門就業、高学歴、中所得	Kafr Shubrahur, Abu Senita	Abu Tawala, Kafr Beni Hilal		Sheykh Issa	Bulaq
高い農業依存度、高世帯所得		Hamra, Sidi Oqba, Zahra		★Liwa Subih	
高い農業依存度、低学歴、出稼ぎ性向		Borr Bahry	Homa, Beni Samrag	Kawamel Bahry, ★Awlad Sheykh	
中間的な村落		Demeshqin			

(注) ★は極端な性向を有する村。

メル・バハリー村が位置している。これらの村は、農業依存度が高く、低教育水準で、出稼ぎ性向のある村群である。これらの村の下には、アウラード・シェイフ村が位置している。アウラード・シェイフ村が突出して離れて位置しているのは、移転所得が突出して高いためであろう。

最後に、デメシュキーン村は原点近くに位置することから、調査村のなかで中間的な性格の村だと考えられる。

以上の分析をまとめたのが、図表6である。下エジプト中心部よりも周辺部と上エジプト地域の農村において農業依存度が高くなっている。しかし、より周辺に位置するオアシス地域の農村では農業依存度は高くない。また、農業依存度と所得水準とは明確な関係がないようである。これらのことは、裏を返せば、従来の近代化論のように、農村社会の構造を次元によって捉えようとするのは不十分だということを表している。

5-2 調査村の属性と個性

以上の属性類型を踏まえて、それが第3節における村の個性に関する議論とどう結びつくかを検討しよう。この点について、指摘すべき重要な点は、次の通りである。

第一は、ボッル・バハリー村とリワー・スピーフ村の二つは、ほかの村との比較において「特殊な」村だということである。前者は漁村であり、後者は1985年に政府によって作られた入植村である。そのため、両者が下エジプト地域とオアシス地域にあって、ほかの村とは異なる属性類型に入ることは容易に想像される。

第二は、オアシス地域の村が一つのまとまりとして把握できることである。所得の高中の違いはあるが、リワー・スピーフ村を除く4つの村が、「政府部門就業・高学歴」を特性としている。このうち、ムニーラ村は1960年代の入植村であり、ある意味で「特殊な」村であるが、その特徴において、ほかの2つの村と違いがない。これは、オアシス地域の村が共通に、希少な地下水に依存し、政府の砂漠開発の対象とされてきたためであろう。

第三は、上エジプト地域の村が一つのまとまりとして把握できることである。

この点において、中部と南部に違いはない。6つの調査村のうち、デメシュキーン村とシェイフ・イーサー村の二つを除く4つの村が、「高い農業依存度・低学歴・出稼ぎ志向」を特性としている。4つの村に、形成時期やアラブ意識の有無において違いがあるものの、それが属性類型の違いに反映しているようには見えない。また、ホーマ村は、他の3つの村が村長職を頂点とした伝統的な村落行政の特徴を持つものに対して、唯一警察の派出所が置かれているが、そのことが異なる属性類型を導くということにはなっていない。

デメシュキーン村とシェイフ・イーサー村がほかの村とは異なった特性を示している理由については、はっきりとしたことは分からない。しかし、おそらくこの二つの村の立地条件と対外社会関係がこのことに関係しているものと思われる。つまり、デメシュキーン村はナイル流域から離れたファイユーム盆地に位置しているが、ファイユーム地方は近年の道路網の完備によって、首都カイロとの結びつきを深めている。シェイフ・イーサー村の場合には、県庁所在地に近いうえ、多くの住民が紅海地方へ出稼ぎに出ている。

第四は、下エジプト地域の村が上エジプト地域の村と異なる属性類型に分類されることである。つまり、下エジプト地域の村は、ボッル・バハリ村という「特殊な」村を除けば、すべて上エジプト地域の村とは異なる属性類型に分類される。

しかし同時に、下エジプト地域の村のなかでは、中心部の村と周辺部の村との間に、異なる特性が見られる。具体的には、比較的中心部に位置しているアブー・スィネータ村、カフル・シュブラフル村、カフル・ベニー・ヒラール村、アブー・タワーラ村の4つの村は、「政府部門就業」の特性を持つものに対して、比較的周辺部に位置しているハムラー村、シーディー・オクバ村、ザフラー村の3つの村は、「高い農業依存度」の特性を持っている。

この差異の理由として考えられるのは、この二つの村類型が位置する地域開発のパターンの違いである。つまり、これまで労働集約的な農業が展開されてきた中心部では、近年になって、土地保有の細分化を背景に、副収入を得るための非農業部門の雇用機会が必要とされている。

これに対して、近代以降遅れて開発された周辺部では、中心部に比して資本集約的な農業が展開されてきた。この地域開発の歴史における発展パターンの違い

が、周辺部の村の景観や属性に影響を与えていると考えられる。その典型が、シーディー・オクバ村である。この村は、もっとも遅れて開発された地域に位置し、57の小さな集落からなる散村形態の村である。

5-3 文化と地域開発

最後に、本稿の分析結果を「文化と地域開発」のタイトルのもとでまとめてみよう。おそらく、本稿におけるもっとも興味深い分析結果は、第4節の末尾で指摘された次の二点であろう。第一は、エジプトの村落社会を説明する最も重要な軸が土地保有と農業への依存度であるという点である。第二は、文化的な要素（以下、社会的なものも含めて、文化的な要素と呼ぶ）を村民の経済行動と関係づけて解釈するのは困難だという点である。

つまり、エジプトは、国民経済や就業構造、あるいは家計の収入構造において、農業の比率が低下している状況下にあっても、依然として農業国としての経済構造を持っているということである。ここに、エジプトの村落が景観にしろ生活パターンにしろ、一様にみえる理由があると思われる。

とはいえ、地域間にまったく差がないわけではない。特に、文化や社会慣習に注目すれば、上エジプト地域と下エジプト地域、オアシス地域との間の違いは歴然としている。そして、先に指摘されたように、文化的な要素と村民の経済行動とは関係がないとするならば、この地域的な違いは経済とは結びつきをもたぬ、あくまでも文化的な違いが原因ということになる。

このことは、エジプト農村部の地域開発にとって、どういう意味をもつのであろうか。見解は文化の継続性をどう評価するかによって、分かれるであろう。

一方では、文化の高い継続性を否定し、地域開発を進めることによって、文化的な環境も変化し、地域間の文化的な差異も解消に向かうだろうと考える。しかし、他方では、経済行動と文化的な要素との間に関係がないとすれば、いくら地域開発を進めたところで、文化的な環境は変化しないため、地域間の文化的な差異も解消に向かうことはないだろうと考える。

われわれはどちらが正しいのか、判断をしかねる。しかし、どちらにせよ、われわれが深く印象付けられるのは、大量な人の移動にもかかわらず、このような

(164) 一橋経済学 第4巻 第1号 2011年1月

地域的な文化の差を許容し続ける、エジプト社会の懐の広さである。

エジプトの経済は、非農業化しているといわれる。確かに、エジプト経済は、農村部においても、非農業部門での雇用機会を広げ、多様に展開している。しかし、それは、現象にとどまるようであり、構造的には、依然として農業に依存している。つまり、現在でも、エジプトは「ナイルの賜物」の刻印を残しているのである。

[参考文献]

岩崎えり奈 2008

「所得水準・就業・教育水準からみたエジプトの地域類型」『アジア経済』第49巻第9号

岩崎えり奈 2009a

『変革期のエジプト社会—マイグレーション・就業・貧困』早山書籍工房

岩崎えり奈 2009b

「エジプトにおける所得の空間分布と構造：都市—農村，カイロー—地方間区分の検証」『アジア研究』59巻2号

加藤博 1993

『私的土地所有権とエジプト社会』創文社

加藤博 1997

『アブー・スィネータ村の醜聞—裁判文書からみたエジプトの村社会』創文社

加藤博 2010

「ナイルをめぐる神話と歴史」水島司編『環境と歴史学 歴史研究の新地平』勉誠出版

加藤博・岩崎えり奈 2005

「エジプトにおけるマイグレーションと地域類型—三種類のデータ(センサス統計・世帯調査データ・地理情報)を接合する試み」『東洋文化研究所紀要』第147冊

加藤博・岩崎えり奈 2011

「エジプト農村の世帯・家族構造」『東洋文化研究所紀要』第159冊

加藤博・長沢栄治 1989

「エジプト」「東アラブにおける社会変容の諸側面」研究会(編)『文献解題 東アラブ近現代史研究』アジア経済研究所

木村喜博 1973

「農地改革前におけるエジプト農村社会の構造－共同体的構成の視角から－」川島武宜・住谷一彦編『共同体の比較史的研究』アジア経済研究所

中岡三益 1969

「エジプトにおける伝統的社会と西欧の衝撃」『後進国経済発展の史的研究－昭和44年中間報告(その2)－』アジア経済研究所・所内資料, 調研45-3号

中岡三益 1973

「エジプトにおける共同体－財産占取の形態と主体にかんするノート－」川島武宜・住谷一彦編『共同体の比較史的研究』アジア経済研究所

長沢栄治 1994

「近代エジプトの村長職をめぐる権力関係」伊能武次(編)『中東諸国における国家と権力構造』アジア経済研究所

Ayrout, H. Habib 1968

The Egyptian Peasant, Beacon Press, Boston

Berque, Jacques 1955a

“Sur la structure sociale de quelques villages égyptiens”, *Annales. Économies, Sociétés, Civilisations*, no. 2

Berque, Jacques 1955b

“Dans le Delta du Nil : le village et l’histoire”, *Bulletin de la société de géographie*

Berque, Jacques 1957

Histoire sociale d’un village égyptien au XXe siècle, Mouton & Co., Paris & La Haye

Cuno, Kenneth M. 1999

“A Tale of Two Villages: Family, Property, and Economic Activity in Rural Egypt in 1840s”, *Proceedings of the British Academy*, no. 96

Fanchette, Sylvie 1997

Delta du Nil. Densité de population et urbanisation des campagnes, Fascicule de Recherches no. 32, URBAMA, Tours

(166) 一橋経済学 第4巻 第1号 2011年1月

Ghannam, A.G. 1944

al-Iqtisād al-zirā'i wa idāra al-mazāri', Cairo

Iwasaki, Erina 2006a

“What is the Aila? : The Comparative Study of Kinship Structure in Egyptian Villages” , *Annals of Japan Association for Middle East Studies (AJAMES)*, no. 22
- 2

Iwasaki, Erina 2006b

“Analytical Framework for the Analysis of Kinship in North African Rural Societies: A Case Study of Commercial Migration in Southern Tunisia”, *Mediterranean World 18*, the Mediterranean Studies Group ed., Hitotsubashi University, Tokyo

Karima Yousfi et Éric Denis 2006

“Sirs al-Layyān, bourg du « Ventre de la Vache » : détour dans l'urbanité du village égyptien idéaltype” , Éric Denis (dir.) *Villes et urbanisation des provinces égyptiennes, Vers l'écoumènopolis?*, KARTHALA & CEDEJ, Paris & Cairo

Kato, Hiroshi 2008

“Is the Egyptian Village a Community”, *International Journal of Public Affairs*, Chiba University, vol. 4, Research Center on Public Affairs for Sustainable Welfare Society, Chiba University

Kato · Iwasaki 2008

Hiroshi Kato and Erina Iwasaki, “Rashda. A village in Dakhla Oasis”, *Mediterranean World 19*, the Mediterranean Studies Group ed., *Mediterranean World 17*, Hitotsubashi University, Tokyo

Kato · Iwasaki 2010

Hiroshi Kato and Erina Iwasaki, “Village Association in Cairo: A Study on Urban-Rural Relationship in Egypt”, *Annals of Japan Association for Middle East Studies (AJAMES)* , no. 26-1

Kato et al. 2004

Hiroshi Kato, Ali El Shazly, and Erina Iwasaki, “Internal Migration Patterns to Greater Cairo — Linking Three Kinds of Data: Census, Household Survey, and

GIS", *Mediterranean World 17*, the Mediterranean Studies Group ed., Hitotsubashi University, Tokyo

Kato et al. 2005

Hiroshi Kato, Erina Iwasaki, Ali El Shazly, and Yutaka Goto, "Migration, Regional Diversity, and Residential Development on the Edge of Greater Cairo – Linking Three Kinds of Data – Census, Household-Survey and Geographical Data - with GIS", Atsuyuki Okabe (ed.) *GIS – Based Studies in the Humanities and Social Sciences*, Taylor & Francis, Oxford

Kato et al. 2006

Hiroshi Kato, Erina Iwasaki, and Naoto Yabe, "Residential Patterns of Rural Migrants in Greater Cairo Suburban Areas", *Annals of Japan Association for Middle East Studies (AJAMES)*, no. 22-2

Kato et al. 2010

Hiroshi Kato, Erina Iwasaki, Eiji Nagasawa, Hisao Anyoji, Nobuhiro Matsuoka and Reiji Kimura, "Rashda: System of Irrigation and Cultivation in a Village in Dakhla Oasis", *Mediterranean World 20*, the Mediterranean Studies Group ed., Hitotsubashi University, Tokyo

Lozach, J. & Hug, G. 1930

L' Habitat rural en Égypte, Société royale de Géographie d'Égypte, Le Caire

Mosseri, V.M. & Audebeau 1921a

"Quelques mots sur l' histoire de l' ezbah égyptienne », *Bulletin de l' Institut d' Égypte*, tome 3, session 1920-1921

Mosseri, V.M. & Audebeau 1921b

Les constructions rurales en Égypte, Le Caire

Ramzi, Muhammad 1968

al-Qāmūs al-jighrāfi, 4 vols, Dar al- Kutub, Cairo

Richards, Alan 1982

Egypt's Agricultural Development, 1800-1980. Technical and Social Change, Westview Press

付録

付録図表1：調査村の世帯規模と年齢構成（人数、％）

	世帯数	世帯員総数	世帯規模	年齢構成			計	(人数)	
				15歳以下	15-64歳	65歳以上			
下エジプト中心部	Abu Senita	600	2,852	4.8	31.5	63.0	5.5	100.0	2,852
	Kafr Shubrahur	142	608	4.3	31.4	63.7	4.9	100.0	608
下エジプト周辺部	Zahra	600	2,469	4.1	34.3	61.5	4.2	100.0	2,469
	Abu Tawala	600	2,317	3.9	29.8	64.2	6.0	100.0	2,317
	Kafr Beni Hilal	595	2,497	4.2	33.2	64.3	2.6	100.0	2,497
	Sidi Oqba	600	2,877	4.8	29.9	67.4	2.8	100.0	2,877
	Hamra	1,000	6,278	6.3	29.1	67.4	3.4	100.0	6,278
	Borr Bahry	200	1,307	6.5	38.4	59.5	2.1	100.0	1,307
上エジプト中部	Homa	600	3,172	5.3	41.8	55.0	3.2	100.0	3,172
	Demeshqin	600	3,291	5.5	38.5	57.8	3.7	100.0	3,291
	Beni Samrag	600	3,712	6.2	41.8	53.5	4.7	100.0	3,712
上エジプト南部	Kawamel Bahry	600	2,907	4.8	40.3	55.7	4.0	100.0	2,907
	Awlad Sheykh	600	2,744	4.6	43.5	53.8	2.8	100.0	2,744
	Sheykh Issa	600	3,343	5.6	30.5	62.3	7.2	100.0	3,343
オアシス	Munira	300	1,332	4.4	25.7	67.5	6.8	100.0	1,332
	Bulaq	301	1,323	4.4	26.1	66.8	7.1	100.0	1,323
	Rashda	550	2,305	4.2	26.3	69.0	4.7	100.0	2,305
	Balat	550	2,269	4.1	27.1	66.9	6.0	100.0	2,269
	Liwa Subih	100	541	5.4	42.9	55.6	1.5	100.0	541
計		9,738	48,144	4.9	33.7	61.9	4.4	100.0	48,144

(出所) 農村世帯調査 2003～2005年。

付録図表2：調査村の10歳以上の教育水準（％）

	非識字	読み書き可	小学校	中学校	高校	高校以上	大学	計	(人数)	
下エジプト中心部	Abu Senita	18.1	14.7	12.6	13.6	29.8	3.2	7.9	100.0	2,282
	Kafr Shubrahur	18.0	18.0	9.2	9.6	34.5	2.7	8.0	100.0	478
下エジプト周辺部	Zahra	36.2	20.1	11.1	11.0	18.4	1.1	2.1	100.0	1,895
	Abu Tawala	25.4	15.9	12.2	13.4	24.0	2.8	6.3	100.0	1,884
	Kafr Beni Hilal	21.1	17.2	8.3	11.4	33.9	2.3	5.8	100.0	1,958
	Sidi Oqba	37.0	15.2	8.5	9.6	27.0	0.6	2.1	100.0	2,346
	Hamra	40.5	13.4	8.1	10.0	23.3	1.1	3.7	100.0	5,130
	Borr Bahry	54.1	16.8	8.7	7.2	10.3	0.9	2.0	100.0	959
上エジプト中部	Homa	53.8	13.1	11.7	7.0	11.8	0.6	2.0	100.0	2,325
	Demeshqin	47.3	19.1	9.7	8.8	11.7	1.2	2.2	100.0	2,497
	Beni Samrag	51.0	14.9	10.2	8.8	11.9	0.9	2.3	100.0	2,687
上エジプト南部	Kawamel Bahry	52.8	17.2	12.9	8.4	7.4	0.6	0.8	100.0	2,140
	Awlad Sheykh	53.1	13.8	13.4	8.2	9.6	0.6	1.4	100.0	1,953
	Sheykh Issa	22.4	15.9	12.7	16.0	28.6	1.9	2.6	100.0	2,708
オアシス	Munira	17.8	14.5	8.7	12.9	36.7	2.7	6.8	100.0	1,109
	Bulaq	16.6	12.4	8.9	9.8	41.6	4.5	6.2	100.0	1,078
	Rashda	14.9	19.4	9.4	9.7	31.6	4.0	11.1	100.0	1,899
	Balat	15.4	20.0	10.5	12.1	25.4	4.2	12.5	100.0	1,855
	Liwa Subih	22.0	20.0	13.9	16.0	24.6	1.3	2.3	100.0	395
計		35.0	16.0	10.4	10.5	22.0	1.8	4.3	100.0	37,578

(出所) 農村世帯調査 2003～2005年。

付録図表 3 : 調査村の世帯所得年間総額と所得源 (エジプト・ポンド、%)

		世帯総所得 (エジプト・ポンド)		所得源 (%)							
		(一人当たり)	(世帯当たり)	農業自営	農業賃金	非農業賃金	非農業自営	不動産	金融	移転	計
下エジプト中心部	Abu Senita	1,829	8,801	33.9	6.6	29.9	6.8	15.3	0.2	7.3	100.0
	Kafr Shubrahur	2,551	9,880	21.1	1.6	40.1	12.3	8.4	0.9	15.6	100.0
下エジプト周辺部	Zahra	2,410	8,773	42.3	2.9	27.7	3.1	13.6	0.1	10.3	100.0
	Abu Tawala	2,331	7,790	28.1	2.0	31.8	4.2	17.1	0.9	15.9	100.0
	Kafr Beni Hilal	2,627	9,599	21.7	3.7	38.6	5.7	12.5	0.9	16.9	100.0
	Sidi Oqba	2,853	11,635	46.3	13.3	13.9	5.2	11.2	0.0	10.1	100.0
	Hamra	2,140	10,507	72.6	0.0	10.6	6.3	6.7	0.1	3.7	100.0
	Borr Bahry	1,903	11,091	18.9	1.4	43.9	5.5	13.0	0.3	17.1	100.0
上エジプト中部	Homa	1,475	6,744	42.5	6.2	25.8	4.8	11.3	0.7	8.8	100.0
	Demeshqin	1,789	8,619	29.8	7.3	32.9	4.0	13.4	0.2	12.4	100.0
上エジプト南部	Beni Samrag	1,847	9,870	36.8	12.0	18.6	5.4	8.3	0.6	18.3	100.0
	Kawamel Bahry	2,143	9,099	45.7	9.3	19.0	8.2	9.1	0.1	8.6	100.0
	Awlad Sheykh	3,091	10,684	27.5	10.1	12.7	4.7	7.0	0.2	37.9	100.0
オアシス	Sheykh Issa	2,985	14,757	18.7	1.8	41.3	4.0	10.3	0.3	23.7	100.0
	Munira	2,701	10,813	18.8	1.3	57.3	2.2	2.7	0.1	17.5	100.0
	Bulaq	2,422	9,726	16.5	3.8	52.1	5.4	2.1	0.3	19.9	100.0
	Rashda	2,707	10,520	29.7	1.8	48.4	4.4	5.9	0.0	9.8	100.0
	Balat	2,655	10,446	32.4	1.0	43.9	2.5	6.3	0.1	13.8	100.0
	Liwa Subih	2,433	11,381	77.4	8.3	11.3	0.0	1.4	0.0	1.5	100.0
計		2,336	9,935	32.7	5.4	31.4	5.0	10.5	0.3	14.6	100.0

(出所) 農村世帯調査 2003~2005 年。

付録図表 4 : 調査村の耕地保有面積 (フェッダーン)

		保有耕地面積 (単位: フェッダーン)						世帯あたりの平均保有面積		
		0	<1	1 to <3	3 to <5	>=5	計 (世帯数)	土地なし世帯を含む	含まない	
下エジプト中心部	Abu Senita	46.0	34.2	19.3	0.5	0.0	100.0	600	0.5	0.9
	Kafr Shubrahur	67.6	19.0	12.7	0.7	0.0	100.0	142	0.3	0.8
下エジプト周辺部	Zahra	43.2	26.8	29.2	0.8	0.0	100.0	600	0.6	1.0
	Abu Tawala	54.5	28.8	14.3	1.7	0.7	100.0	600	0.4	0.9
	Kafr Beni Hilal	62.2	21.7	14.8	1.2	0.2	100.0	595	0.4	0.9
	Sidi Oqba	42.0	15.2	33.3	6.7	2.8	100.0	600	1.0	1.8
	Hamra	50.9	9.9	30.9	7.2	1.1	100.0	1,000	0.9	1.8
	Borr Bahry	90.5	0.5	7.0	0.0	2.0	100.0	200	0.3	3.6
上エジプト中部	Homa	32.3	40.2	22.5	3.7	1.3	100.0	600	0.8	1.1
	Demeshqin	51.0	32.0	15.0	1.7	0.3	100.0	600	0.4	0.9
	Beni Samrag	50.5	15.3	26.0	4.5	3.7	100.0	600	0.9	1.8
上エジプト南部	Kawamel Bahry	42.3	19.8	28.8	5.8	3.2	100.0	600	1.0	1.7
	Awlad Sheykh	53.5	32.5	12.3	1.5	0.2	100.0	600	0.4	0.8
	Sheykh Issa	62.7	22.8	11.2	1.2	2.2	100.0	600	0.4	1.2
オアシス	Munira	48.0	13.0	23.7	8.7	6.7	100.0	300	1.1	2.1
	Bulaq	63.8	5.0	14.0	13.0	4.3	100.0	301	1.0	2.8
	Rashda	59.5	4.2	19.5	13.6	3.3	100.0	550	1.1	2.8
	Balat	51.5	1.1	23.8	16.2	7.5	100.0	550	1.5	3.1
	Liwa Subih	14.0	0.0	8.0	13.0	65.0	100.0	100	5.2	6.0
計		51.2	20.0	21.2	5.0	2.7	100.0	9,738	0.8	1.6

(出所) 農村世帯調査 2003~2005 年。

(注) 1 フェッダーンは、4,200m²。

付録図表5：調査村における共同体慣行（モスク建設への参加）（％）

		参加しない	労働力の提供	費用の負担	物の贈与	その他	計	(人数)
下エジプト中心部	Abu Senita	98.7	0.0	0.2	0.7	0.5	100.0	599
	Kafr Shubrahur	57.0	16.9	1.4	23.2	1.4	100.0	142
下エジプト周辺部	Zahra	48.5	0.3	21.3	1.2	28.7	100.0	600
	Abu Tawala	48.5	0.5	17.0	4.8	29.2	100.0	600
	Kafr Beni Hilal	86.1	3.9	3.0	7.1	0.0	100.0	595
	Sidi Oqba	87.2	3.5	4.3	4.5	0.5	100.0	600
	Hamra	71.1	7.3	3.3	4.9	13.4	100.0	1,000
	Borr Bahry	39.5	4.0	23.0	1.5	32.0	100.0	200
上エジプト中部	Homa	69.0	13.7	12.8	3.8	0.7	100.0	600
	Demeshqin	77.8	4.0	4.8	11.0	2.3	100.0	600
	Beni Samrag	81.2	4.2	4.0	8.8	1.8	100.0	601
上エジプト南部	Kawamel Bahry	76.3	2.3	13.7	0.7	7.0	100.0	600
	Awlad Sheykh	82.2	1.3	11.0	1.2	4.3	100.0	600
	Sheykh Issa	85.7	0.2	6.0	7.5	0.7	100.0	600
オアシス	Munira	49.7	23.0	19.0	2.3	6.0	100.0	300
	Bulaq	63.1	3.0	30.2	2.0	1.7	100.0	301
	Rashda	38.7	28.5	25.6	6.0	1.1	100.0	550
	Balat	12.7	20.4	64.2	2.4	0.4	100.0	550
	Liwa Subih	29.0	22.0	45.0	0.0	4.0	100.0	100
計		67.4	7.0	13.9	4.6	7.1	100.0	9,738

(出所) 農村世帯調査 2003～2005年。

(注) 「物の供与」は、建設材料等の供与を指す。

付録図表6：調査村における世帯主と配偶者との関係（％）

		父方のイトコ	母方のイトコ	父方のマイトコ	母方のマイトコ	父方の他の親族	母方の他の親族	村民	職場の同僚	その他	計	(人数)
下エジプト中心部	Abu Senita	11.4	6.7	2.3	0.2	3.7	3.9	44.9	0.8	26.2	100.0	519
	Kafr Shubrahur	7.3	8.1	0.0	0.8	2.4	2.4	6.5	0.8	71.8	100.0	124
下エジプト周辺部	Zahra	7.2	10.7	2.0	1.5	3.7	5.5	51.8	0.6	17.1	100.0	543
	Abu Tawala	7.2	7.8	1.2	2.2	5.2	7.2	52.7	0.2	16.5	100.0	503
	Kafr Beni Hilal	13.9	6.7	1.2	0.6	2.7	9.6	42.5	0.8	22.1	100.0	520
	Sidi Oqba	18.6	7.1	0.8	0.4	0.4	3.3	47.8	1.2	20.4	100.0	510
	Hamra	15.2	8.4	0.6	0.0	2.1	3.7	55.5	0.1	14.4	100.0	842
	Borr Bahry	10.0	6.3	0.5	0.0	3.7	4.2	61.1	0.0	14.2	100.0	190
上エジプト中部	Homa	25.1	10.3	6.3	1.7	6.9	4.4	33.0	0.6	11.8	100.0	525
	Demeshqin	10.2	8.2	2.9	0.2	5.1	4.7	54.3	1.4	13.1	100.0	512
	Beni Samrag	37.3	9.9	4.8	1.1	10.5	3.6	21.0	0.4	11.4	100.0	525
上エジプト南部	Kawamel Bahry	16.9	15.1	6.3	0.4	10.7	6.1	26.3	0.4	18.0	100.0	544
	Awlad Sheykh	26.3	18.1	9.8	3.5	14.9	3.3	17.1	0.0	7.0	100.0	543
	Sheykh Issa	24.0	10.8	5.6	1.1	8.7	10.4	22.7	0.4	16.2	100.0	462
オアシス	Munira	15.3	14.6	6.0	0.8	8.2	3.7	35.8	0.4	15.3	100.0	268
	Bulaq	10.4	10.8	2.4	1.6	6.8	3.6	47.2	2.0	15.2	100.0	250
	Rashda	6.6	5.4	1.5	0.2	8.1	6.2	63.1	0.4	8.5	100.0	518
	Balat	9.8	4.2	1.4	0.6	2.8	4.6	68.1	0.4	8.2	100.0	501
	Liwa Subih	14.4	10.3	2.1	0.0	3.1	4.1	39.2	1.0	25.8	100.0	97
計		15.9	9.4	3.2	0.9	5.9	5.2	43.0	0.6	16.0	100.0	8,496

(出所) 農村世帯調査 2003～2005年。

付録図表7: 「あなたは村長が村民のスポークスマンとしての役割を果たしていると思いますか?」 (%)

		非常にそう思う	まあまあそう思う	どちらとも言えない	あまりそう思わない	まったくそう思わない	無回答・非該当	計	(人数)
下エジプト中心部	Abu Senita	15.8	22.0	31.3	4.8	18.2	7.8	100.0	600
	Kafr Shubrahur	71.8	18.3	5.6	0.7	3.5	0.0	100.0	142
下エジプト周辺部	Zahra	0.3	0.5	0.0	0.0	0.0	99.2	100.0	600
	Abu Tawala	78.0	8.2	7.7	2.0	4.2	0.0	100.0	600
	Kafr Beni Hilal	59.3	16.5	21.5	1.0	0.3	1.3	100.0	595
	Sidi Oqba	56.7	18.6	15.6	2.7	5.1	1.3	100.0	600
	Hamra	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0	100.0	1,000
	Borr Bahry	53.5	26.0	18.5	1.2	0.2	0.7	100.0	200
上エジプト中部	Homa	0.7	3.0	1.2	0.3	2.5	92.3	100.0	600
	Demeshqin	64.7	10.2	5.8	4.3	4.0	11.0	100.0	600
	Beni Samrag	29.6	13.6	15.8	7.2	25.1	8.7	100.0	600
上エジプト南部	Kawamel Bahry	76.7	8.7	11.5	0.8	1.5	0.8	100.0	600
	Awlad Sheykh	92.5	2.5	4.7	0.2	0.2	0.0	100.0	600
	Sheykh Issa	55.2	16.5	20.8	2.7	3.0	1.8	100.0	600
オアシス	Munira	11.3	20.7	18.7	5.0	3.7	40.7	100.0	300
	Bulaq	16.0	43.2	9.3	5.7	5.0	20.9	100.0	301
	Rashda	75.1	10.7	11.6	1.6	0.6	0.4	100.0	550
	Balat	48.4	23.3	10.2	9.3	8.4	0.6	100.0	550
	Liwa Subih	0.0	2.0	1.0	1.0	33.0	63.0	100.0	100
計	47.1	13.9	12.3	2.8	5.3	18.6	100.0	9,738	

(出所) 農村世帯調査 2003~2005 年。

付録図表8: 「あなたの意見では、村民の安全をまもる上で最も重要な人物は誰ですか?」 (%)

		警察	村長	シェイフ・バラド	シェイフ・アーイラ	その他	計	(人数)
下エジプト中心部	Abu Senita	69.7	6.3	10.2	6.3	7.5	100.0	600
	Kafr Shubrahur	76.1	19.7	0.0	0.7	3.5	100.0	142
下エジプト周辺部	Zahra	42.2	2.3	48.5	5.5	1.5	100.0	600
	Abu Tawala	28.7	66.8	1.2	2.8	0.5	100.0	600
	Kafr Beni Hilal	37.7	56.3	2.4	2.4	1.4	100.0	595
	Sidi Oqba	26.5	68.5	2.5	1.7	0.8	100.0	600
	Hamra	57.7	38.0	1.1	2.0	1.2	100.0	1,000
	Borr Bahry	99.0	0.0	1.0	0.0	0.0	100.0	200
上エジプト中部	Homa	97.0	0.0	1.2	1.2	0.7	100.0	600
	Demeshqin	44.0	35.3	11.8	5.2	3.7	100.0	600
	Beni Samrag	52.4	15.8	10.7	18.5	2.7	100.0	600
上エジプト南部	Kawamel Bahry	49.7	48.3	0.3	0.8	0.8	100.0	600
	Awlad Sheykh	48.5	50.5	0.5	0.3	0.2	100.0	600
	Sheykh Issa	41.0	50.2	2.2	5.0	1.7	100.0	600
オアシス	Munira	76.0	3.7	15.7	4.3	0.3	100.0	300
	Bulaq	85.4	6.0	8.6	0.0	0.0	100.0	301
	Rashda	28.9	56.6	5.3	3.6	5.6	100.0	550
	Balat	47.8	35.3	5.8	2.6	8.5	100.0	550
	Liwa Subih	89.0	0.0	1.0	3.0	7.0	100.0	100
計	52.4	34.3	7.2	3.8	2.4	100.0	9,738	

(出所) 農村世帯調査 2003~2005 年。

(注) 「その他」は、「守衛」や「政府」などの回答である。

[図表一覧]

図表1：19調査村の概要

図表2：19調査村の立地

図表3：19調査村の個性

図表4：多重対応分析結果（第1軸と第2軸の散布図）

図表5：多重対応分析における各項目の座標値

図表6：調査村の類型

付録図表1：調査村の世帯規模と年齢構成（人数、%）

付録図表2：調査村の10歳以上の教育水準（%）

付録図表3：調査村の世帯所得年間総額と所得源（エジプト・ポンド、%）

付録図表4：調査村の耕地保有面積（フェッダーン）

付録図表5：調査村における共同体慣行（モスク建設への参加）（%）

付録図表6：調査村における世帯主と配偶者との関係（%）

付録図表7：「あなたは村長が村民のスポークスマンとしての役割を果たしていると思
いますか？」（%）

付録図表8：「あなたの意見では、村民の安全をまもる上で最も重要な人物は誰です
か？」（%）

注（5）図表：19調査村の所得水準・教育水準・就業部門からみたクラスターの特性